シャンブレーとデニムのウエスタンシャツはそれぞれ14800円と9800円。Levi'sをモチーフに、ボタン素材まで細部に復刻。復刻だけでなく、ケブラー素材や無撚糸を使った新素材デニムの開発にも余念はない

In Vogue on the stage Ver.2

Ver.2

Denime

ドゥニーム

協力：ドゥニーム京都店（075・257・2601）

※京都モデル以外のアイテム協力「PORKY'S（075・464・0221）」

※デニムに数字をペイントしたものはフィッティング用で、実際に販売はされていません

京都店のみで販売されるKYOTOモデル19000円。XXモデルよりも、さらに本物を忠実に再現。店舗で採寸りイズとともにウォッシュ後のサンプルを用意して、ウォッシュ後の縮みを計算したフィッティングが可能

レプリカは本物を越えて…

TEXT / TRYOUT　PHOTO / AKIO TAKAHASHI

Denime（ドゥニーム）は、仏語でデニムの意味。そのまんま、ド直球なネーミングからも王道思考が垣間見える。もちろん、倉敷市のデニム工場「capital」にもリスペクトした、シールもON

マイナーチェンジを繰り返しながらも、10年間リリースされ続けた「DenimeをDenimeたらしめる最高傑作」のXXモデル23000円（W33まで）。Levisにおける501とでも言えば解りやすいだろうか

こちらも和歌山県の専用工場でつくられるスウェット13800円。それぞれ専用工場に発注する姿勢も特徴のひとつ。'60年代のビートニクス時代を彷彿させるフリーダム・スリーブ（もちろん機能的＝動きやすい）を採用

古着店やメンズ誌が、間に葬りたくて仕方のない過去最大の汚点、ヴィンテージデニムブーム（未だに、言ってる人もいるけど…）。「赤ミミ」や「タテ落ち」など専門用語が濫用され、骨董的なLevisの大戦モデルが100万円という値段も今は懐かしくも悲しい話。そんなヴィンテージなGパンが最過熱した'80年代後半に、カウンターカルチャーのように突如登場したのがレプリカデニム。今でこそ、忠実に復刻する各レプリカブランドが一様に技術の高さを競っているが、そのスタートは地味なモノ。当然、その評価を聞いては、一種の偽物的扱いで多勢に無勢だった印象を思い出す。だが、そんな中にも強烈な個性を発揮したのが、今回紹介のDenimeだった。その独自のヴィンテージ解釈＆究極の再現性。ブームという向かい風（実際当時はリーバイスしか売れなかった）を逆行しながらも、特に本物のよさを体得していたハズの頑固系販売員に何故かウケた。

当時から、他社と一線を画すDenime最大のコンセプトは「ブルージーンズ＝色落ち」。岡山県倉敷市のデニム専門ファクトリーに数々のオーダーをかけ、本物よりも藍色の強さを強調。色落ちしやすく、しかも「アタリ」をリアルに再現可能な究極のレプリカ。今や本家、Levisがマネをしたくても不可能な、日本人好みの独自濃藍カラーを浸透させた。しかも、その工場の話によると同モデルでもシーズン毎に、マイナーチェンジの改良が加えられるとか…。

現在でもDenimeの林代表はLevisを絶対に着用しないそうだ。おそらく「自分がLevisに納得したら、Denimeを進化させる理由がない」といったトコロだろう。本物（Levis）を目指して常に進歩し続けたDenime。周囲を見渡せば、いつのまにやら本物を越えた超本物になっていた。